

# 『ヘーリアント』における 古ザクセン語の再帰代名詞の用法

——中動相を参考に——

志 田 章

## 1

約6,000行に及ぶ叙事詩『ヘーリアント』<sup>1</sup>は9世紀前半に、古ザクセン語を使いこなし、伝統的な作詩法に通じた無名の修道僧によって著されたとされている。『ヘーリアント』の特徴の一つとして、キリスト像について述べるなら、これと同じ頃書かれた『タツィアーン』が、ラテン語聖書からの忠実な翻訳と一般に言われている一方、そこでは、キリストは神が遣わした救世主としての聖なる神の子だけではなく、同時に「国の見張り」(the landes uuard)<sup>2</sup>であり、弟子としての勇士(helið)を率いる「王たちの中で最も力ある者」(kuningo rîkeost)<sup>3</sup>でもある。つまり、B. ゴピンスキーが、J. ラトファーから引用しているように、『ヘーリアント』では「人となった神の子とその弟子達の関係」が、当時のゲルマン的な「権力ある主人とその従士達という信頼の置ける関係に譬え」<sup>4</sup>られている。

ところで、『ヘーリアント』では、再帰代名詞が動詞に添えられ、再帰形を多数構成している。以下では、これらの再帰代名詞を「動作」の観点から分類整理し、最後に再帰形の語順及び意味について述べてみたい。

## 2

古ザクセン語は、現代ドイツ語、中高ドイツ語、古高ドイツ語及びゴート語等とは異なり、特定の再帰代名詞を所有せず、人称代名詞を再帰代名詞に代用している。それを示すと表1<sup>5</sup>のようになる。

表 1

		Singular.		
		Mask.	Neutr.	Fem.
N.	<i>hē, hie; hi</i>	} <i>it, et</i>		<i>siu (oder=Akk.)</i>
A.	<i>ina, -e</i>	}		<i>siu, -e, sea</i>
G.	} <i>is, es</i>			<i>ira, -e; iru, -o</i>
D.	} <i>imu, -o; im</i>			<i>iru, -o; ira.</i>
Plural.				
N. A.	} <i>sia, -e, sea, se   siu (oder=M. F.)    = M.</i>			
G.	} <i>iro, -a, era</i>			
D.	} <i>im</i>			

		Singular.	
N.	<i>ih 'ich'</i>		<i>thū, tu 'du'</i>
A.	<i>mik; mī, me</i>		<i>thik; thi</i>
D.	<i>mī, me</i>		<i>thī</i>
G.	<i>mīn</i>		<i>thīn.</i>
Dual.			
N.	<i>wit</i>		<i>git</i>
A. D.	<i>unk</i>		<i>ink</i>
G.	<i>unkero, -aro</i>		<i>inker(o).</i>
Plural.			
N.	<i>wī, we</i>		<i>gī, ge</i>
A. D.	<i>ūs</i>		<i>eu, iu(u), giū</i>
G.	<i>ūser</i>		{ <i>euwar, iuwar, -er;</i> <i>iuwaro, -oro, -ero, -era.</i>

\*それぞれの属格・与格・対格が再帰代名詞として用いられる。

F. ホルトハウゼンは、『古ザクセン語入門』の中で『ヘーリアント』から、関心の与格<sup>6</sup>の再帰代名詞として次の例を挙げている<sup>7</sup>。 *būida im bi thero brūdi* (<ヘロデ王は>その婦人のもとに住んでいた 2706), *sitit imo thar* (<キリストは>そこにずっと座る 5976), *uuârūn im barno lōs*. (<ザカリアとその妻には>子供がなかった 87), *gang thi!* (行きなさい 3893), *arēs im thuo the rīkeo* (立ち上がった, その時権力あるキリストは 4714), *fiskodun im* (<アンドレアスとペテロは網で>魚をとって

いた 1156), *sôkeat iu licht godes* (神の世を探しなさい 946), *mênda im*, (<しかし, 支配者キリストはもっと多くのことを>考えていた 3445), *he im ni anriedi* (彼<=ザカリア>が驚かないようにと 116), *im far-uuirkian* (<彼らがそこで> 罪を犯さないように 3394), *than sprikit im god*, (それから<再び支配する者>神は言う 4408, ホルトハウゼンは *im* を再帰代名詞と見なしていると思われるが, E. H. ゼールト 『古ザクセン語辞典』では再帰代名詞ではなく人称代名詞に分類されている)<sup>8</sup>。

これらの再帰形をホルトハウゼンはギリシア語の中動相に相当するとしている<sup>9</sup>が、この中動相には、F. ブロッチェの『ギリシア語入門』によると4種類の用法がある。1) 再帰的中動相 (das reflexive Medium) *λούμαι*, (ich wasche mich), 2) 利害の中動相 (das Medium des Interesses) *μεταπέμπομαι*, (ich sende nach jem. in meinem Interesse ich lasse holen), 3) 相互的中動相 (das reziproke Medium) *μάχεσθαι*, (miteinander kämpfen), 4) 動的中動相 (das dynamische Medium: 身体的及び精神的な力の表現), *πολιτεύω*, (bin Bürger) *πολιτεύομαι*, (betätige mich als Bürger)。さらに彼はラテン語における Deponentia (形式所相動詞, 或は能動欠如動詞), 例えば *vereor* (ich fürchte mich), は、本来一種の中動相であったと付け足している<sup>10</sup>。

また、ホルトハウゼンは動詞の表す動作の種類に従って、中動相に相当する再帰表現を分類している<sup>11</sup>。つまり、a) 静止 (Ruhe), b) 動き (Bewegung), そして c) 身体的 (körperlich) 及び, d) 精神的 (geistig) 活動 (Tätigkeit) の四つである。これとブロッチェの4用法を比較するなら、表2のようになる。

表2

ホルトハウゼン		ブロッチェ
a) 静止	—	なし
b) 動作	—	2) 利害の中動相
c) 活動	—	4) 動的中動相
d) 活動	—	4) 動的中動相
なし	—	1) 再帰的中動相
なし	—	3) 相互的中動相

表2を動作の種類に従ってしまとめると、a) 静止、b) 利害の動作、c) 身体的力を表す活動、d) 精神的力を表す活動、e) 再帰的動作、f) 相互的動作の諸用法であり、さらに、g) 命令形を加えると7用法になる。これらの静止・動作・活動を表す動詞には、属格・与格・対格のいずれかの再帰代名詞が、その一構成要素として付け加えられることができる。以下、それぞれについて具体例を挙げ説明していきたい。

#### (a) 静止

動作が完了しそれが持続している場合や、或る状態がずっと続いている場合に、与格の再帰代名詞が添えられることがある。ホルトハウゼンの例文では、*bûida im bi thero brûdi, sitit imo thâr, uuârun im barno lôs* であろう。しかし、これらの動詞には、常に与格再帰代名詞が添えられているわけではない。例えば、*bûida* (*bûan*>不定詞) は本文中2度使われ1度だけ、*sitit* (*sittian*) は47度中9度、そして、*uuârun* (*uuesan*) 約700度中41度、与格の再帰代名詞を伴っているに過ぎない。以上の他に、『ヘーリアント』の中で、この種の動詞は筆者が調べた限りでは9例あった。以下はそれを示したものである。

*hebbian* (*haben*, 340[33]), 左から、古ザクセン語・意味・本文中での使用回数・再帰代名詞を伴っている回数を表す。以下、同様にして表す), *bîdan* (*verweilen, erwarten*, 23[3]), *gistandan* (*stehen*, 4[1]), *libbian* (*leben*, 26[3]), *liggian* (*liegen*, 21[1]), *stân* (*stehen*, 20[1]), *standan* (*stehen*, 76[3]), *uuardon* (*sich hüten*, 12[4]), *uuoanon* (*verweilen, wohnen*, 9[3])

*hebbian* (*haben*) は、340例中33例が再帰代名詞を添えて使われている。これらは、*hebbian* の対格目的語の表す意味によって五つに整理できる。それらの対格目的語は、常に形容詞(句)で修飾されている。1) 感情・気持ち・心 *habda im hêlagna gêst, / sâliglîcan sebon* (<ペテロは> 神聖なる心を持っていた/至福な気持ちを 467), *habdun im fêgnien hugi/ uurêðen uuillion* (<ユダヤ出自のかなり多くの者達は>悪い気持

ちを持っていた／悪意を 1230), ferhten hugi (敬けんな気持ちを 1238), fasten hugi (揺るがぬ気持ちを 3541), tuiffien hugi (疑い深い気持ちを 3704), morðhugi (殺人を犯す考えを 4221, この場合は morð+hugi の造語である), grimmen hugi (悪意ある気持ちを 4629) hugi uulbo (狼の気持ちを 5057, uulbo は uulf の複数・属格である), 2) 随伴 (前置詞句 te+Dativ を伴って) habdun *im* hebenkuning/ simbla te gisíða, sunu drohtines (<ヨゼフとマリアは>天の王を連れだった／いつも旅の供のために, 主の子を 533), その他, 834, 1252, 2171, 2714 がある. 3) 所有 hebbiu *mi* ôdes genôg (<キリストのもとにやって来た傭兵隊長が>私は相続財産を十分持っています 2112), endi *imu* so filu habde/ gôdes an is gardun (<その裕福な人は>また, とても多くの財産を持っていた／彼の家に 3331-2), habde *imu* diurlíc líf (彼は, 豪華な生活を送った 3333). 4) 闘争 habdun *im* lêðan stríð (<敵意のあるユダヤ人達は>忌まわしい争いを行った 2341,他に 4265がある). 5) 能力・力 habda *im* eft is spráca giuuald (<ザカリアは>再び話すことができた 238. spráca は弱変化女性名詞 spráka の単数・属格である), 他に 4516 がある. 6) 前置詞の目的語である与格の再帰代名詞がある. 今述べた 1)～5) の再帰代名詞は, 文全体を修飾する副詞と考えられるが, 6) の文法機能は名詞である. 例えば, habdun that barn godes mid *im*/ hêlagna Krist, (<ヨゼフとマリアは>神の子を連れて行った／聖なるキリストを 459) の場合, 再帰代名詞 *im* は前置詞 mid の与格目的語であるが, 2) の habdun *im* hebenkuning... では, *im* は副詞的要素である. 6) の例としては, 他に 298, 933, 2983, 3957 がある.

最後に *uuesan* は再帰代名詞を文構成要素に伴って 41 度現れ, 6 通りの意味に分類できるだろう. 1) 滞在 unárun *im* an Nazarethburg, (<ヨゼフとマリアは>ナザレスブルグにいた 782. 他に, 1027, 1052, 1121, 2002, 3980, 4632, 5865, 5983 がある). 2) 出身 sume uuárun sie *im* eft Iudeono cunnies, (それに対して, かなり多くの者はユダヤの民の出自であった 1227. 他に, 2985, 3953, 5968 がある). 3) 身分・職業 uuas *im* ambahteo eðilero manno (<マタイは>高貴な人々の

奉行人として働いていた 1193. 他に, 506, 2112, 2187, 3969 がある).

4) 性格・特徴 *uuas iru gialdrod idis*: (<ザカリアの妻は>年老いた婦人だった 79. 他に, 87, 654, 987, 1175, 1233, 1234, 1882, 2219, 2465, 2495, 3993, 4100, 4220, 5695, 5716 がある). 5) 成長 *uuas iru thiorna githigan* (<マリアは>生娘に成長した 253. 他に, 859, 962 がある). 6) 随伴 *im simlun uuas garu mid goldu* (<ある裕福な男は>いつも金で身を飾っていた 3329-30. 他に, 4239, 5964, 5616 がある).

#### (b) 利害の動作

一時的, 瞬間的な身体の動きを表し, かつ与格の再帰代名詞を従えている動詞は筆者が調べた範囲内では 51 例あった. これらの動詞の表す動作は, 与格再帰代名詞を添えられることによって, 主語に対して利害その他の点で, それが付加されない場合より, 何か特別に深い関係を持っている場合が多い. これらの動詞も(a)同様, 再帰代名詞と一緒に使用されている割合は低い. 再帰代名詞との使用頻度が高い動詞でも, 例えば, *gikiosan* (*wählen*) は 25 度中 9 度, *biginnan* (*beginnen*) は 58 度中 15 度 *sôkian* (*suchen*) は, 55 度中 11 度で他は 1 割にも満たない. 次にその他の例を挙げる.

*arîsan* (*sich erheben*, 4[1] <本文中 4 度使われ 1 度再帰代名詞を伴っていることを表す>, 以下同様にして表す), *dôn* (*tun*, 109[3]), *driban* (*ausführen*, *handeln*, 8[3]), *fâhan* (*fassen*, 17[3]), *fardôn* (*frevelhaft handeln*, 4[1]), *farlâtan* (*verlassen*, 51[1]), *faruuerkon* (*sich versündigen*, 3[1]), *faruuirkian* (*sich versündigen*, 7[1]), *fiscon* (*Fische fangen*, 1[1]), *gidragan* (*tragen*, 7[1]), *gidôn* (*tun*, 39[2]), *gifrummian* (*vollbringen*, 38[1]), *gihnîgan* (*sich neigen*, 3[3]), *giniman* (*nehmen*, 7[2]), *gisônian* (*aussöhnen*, 2[1]), *gisprekan* (*sprechen*, 52[3]), *giuinnan* (*gewinnen*, 16[2]), *giuuirkian* (*tun*, *erlangen*, 38[2]), *giuuređian* (*stützen*, 1[1]), *halon* (*holen*, 8[2]), *hnîgan*

(sich neigen, 1{1}), kiosan (wählen, 7{3}), lédian (leiten, bringen, 31{1}), línon (lernen, 9{2}), mangon (Handel treiben, 1{1}), niman (nehmen, 41{5}), sâian (säen, 6{2}), sehan (sehen, 43{2}), slahan (schlagen, 14{1}), sprekan (sprechen, 188{5}), stîgan (steigen, 5{1}), sundion (sich versündigen, 1{1}), tilian (erlangen, 1{1}), thurhgangan (bis an Ende gehen, 3{1}), uuerðan (werden, 378{5}).

この中で faruuirkian に当たるゴート語 *frawaurkjan* は、与格再帰代名詞を添えられることがある *frawaurhta mis in himin* (私は天に対して罪を犯した Lukas 15-18, 同様な表現は Matthäus 27-4 にもある)。またギリシア語中動相 *δέχομαι* (nehmen) はゴート語では与格の再帰形で訳されている *nim þus bokos* (証文を取りなさい Lukas 16-6, 7)<sup>12</sup>。

(c) 身体的力を表す活動

ここでは「行く・来る」という、場所の移動を表す動詞を想定している。この場合も(a)(b)同様、与格の再帰代名詞を従えている割合は僅かである。例えば, *cuman* (kommen) は246例あるが、その内、再帰代名詞を伴っているのは4例である。

(1) *heliðos quâmun, / liudi te lande,*  
(男達は来た / 人々は国へ 2266-67)

(2) *quâmun im te Cafarnaum.*  
(＜筆者注：キリストとその弟子達は＞カファオムへ行った 3184)

例文(1)(2)とも主文、かつ定動詞は過去・複数形 *quâmun* であるが、(2)でのみ再帰代名詞が使われている。なお、(2)は主語が述べられていない文である。その他、身体的活動、つまり場所の移動を表す動詞と与格再帰代名詞の同伴関係を表示すると次のようになる。

*faran* (sich von einem Ort zum andern bewegen, 94{16}{7}),

gangan (gehen, 164{28}{11}), gigangan (gehen, 3{0}), giuúitan (sich auf den Weg machen, gehen, 67{61}{33}), huarbon (gehen, 2{0}), huerban (hin und her gehen, 20{1}{0}), îlian (eilen, 2{0}), lîðan (gehen, 8{0}), rinnan (laufen, eilen, 1{1}{0}), siðon, siðogean (gehen, ziehen, 15{1}{0}), skrîdan (schreiten, gehen, 8{1}{0}), suôgan (rauschend einherfahren, 1{0}), uuendian (sich wenden 29{2}{0}), uuindan (sich wenden, 2{0})

\*それぞれ左から古ザクセン語・意味・使用回数・再帰与格を伴っている回数を表す。

\*右端 { } 内は再帰形でキリストが主語になっている回数である。

表 2, 14例の中で giuúitan だけが, 67回のうち61回 (写本による違いを含めると58回)まで与格の再帰代名詞と共に使われている。このことは, 使用回数が少ない gigangan, huarbon, îlian, rinnan, suôgan, uuindan 等についてははっきりしないが, 残りの7例と明らかに異なっている。giuúitan は約9割が再帰代名詞を従えているが, faran, gangan では約17%, 残る5例は1割にも満たないのである。giuúitan が, 例えばドゥーデンの文法で定義されているような再帰動詞 (reflexives Verb)<sup>13</sup>かどうかは, 述べることはできない。ここでは, 与格の再帰代名詞が使われていない9例を挙げておくだけにしたい。

(3) Krist up giuúêt/ fagar fon them flôde, fribubarn godes, (キリストは上がった/優雅なる者は, その流れから, 平和なる神の子は, 982-3), (4) Thô he selbo giuúêt/ aftar them dôpislea, drohtin the gôdo, (そこで彼は赴いた/洗礼の後, 良き主は, 1024-5), (5) Thô he mid is gesiðon giuúêt/ eft an Galilœo land, godes êgan barn, (そこで彼は弟子達と赴いた/再びガリラヤの国へ, 神自身の子は, 2290-1), (6) siðor iro frâho giuúêt/ an that gebirgi uppan, barno rîkeost, uualdand an is uulleon. (彼らの主が赴いてから/山岳へと, 子達の中で最強の者が, 支配者が自らの

意思で, 2900-2), (7) antat thi u lihte giuuêt/ sunne te sedle. (光輝くものが / 太陽が沈むまでに, 4232-33), (8) gramon in geuuitun/ an thene lichamon, lêða uuhti, (悪霊が中に入った / その<ユダの>身体の中に, 悪霊が, 4622-23), (9) Thie fiund eft geuuitun/ fan themu berge te burg. (敵たちは帰ってきた / 山から町へ, 4928-9), (10) giuuêt ina thô uuarmien, (<ペテロは>そこで身体を暖めるために行った, 4967), (11) Geuuitun thuo gangan thanan/ uuôpiandi uuif, (それからそこを立ち去った / 嘆き悲しんでいる婦人達は, 5743-4). (4), (5), (11) はC写本に依る. M写本では3例とも再帰代名詞を伴っている)<sup>14</sup>.

giuuitanは現代ドイツ語では sich begeben, sich auf den Weg machen に当たるが, この再帰代名詞は対格であり, 動詞それ自身他動詞では「行く」という意味とは無関係である. 現代英語で betake oneself が sich begeben と同じ意味を持つが, やはり他動詞である. 古英語で書かれた Beowulf<sup>15</sup> にも gewitan (depart, go) が例えば *Him da Scyld gewât* (それから, スキルトは出発した 26. *him* は he (er) の与格で, ここでは再帰代名詞として使われている) のように用いられているが, 古ザクセン語 giuuitan に較べると, 再帰代名詞を添えられている割合は低い. ギリシア語からの翻訳である『ゴート語聖書』では, ギリシア語の中動相 ἐρχομαι (gehen) は再帰動詞を伴わない galeipan (gehen) (Johannes 7-45, 14-23 など) で, しかし, 同じく中動相 δανεισασθαι (sich Geld leihen) と συνηθέειντο (sich verabreden) には, それぞれ leiban sis (Matthaeus 5-42), gaqipan sis (Johannes 9-22)<sup>16</sup> と与格の再帰代名詞を添え, 分析的に訳している. また古ノルド語には, 語尾に -sk (sich) を添えて場所の移動を表す場合があり, 例えば, dragask (gehen) farask (gehen), komask (kommen)<sup>17</sup> などがある.

#### (d) 精神的力を表す活動

疑い・思考・驚きなど心的・内面的な活動を意味する動詞にも, 与格の再帰代名詞が添えられることがある.

antdrádan (sich fürchten vor) は、14度のうち11度、与格の再帰代名詞と共に現れている。hêt that he *im* ni-andrêdi : (<その天使は> 彼 <=ザカリア> が恐れないようにと言った 116. その他, 396, 1903, 1907, 2252, 2943, 3157, 3495, 3942, 4882, 5818 がある)。再帰代名詞が添えられていない例は antdrêd that sie manno barn líbu binâmin (<ヨゼフは> 人の子達が彼女<=マリア>の命を奪わないかと恐れた, 305-6), andrêd that he thene uueroldcuning/ sprácono gespôni endi spâhun uuordun/ that he sie farlêti (<ヘロデの妻は> 彼<=キリスト>が王を/言葉で、賢い言葉で/彼女のもとを去るよう駆り立てることを恐れた 2718-9), andrêdun that it *im* mahtig fîund/ te gidroge dâdi (<12人の弟子達は> それ<=キリスト>が嵐の海の上を進んで来ること>を彼らに強力な悪魔が/幻覚を起こすためにしていると恐れた 2924-5), 以上3例である。この3例はすべてコロんかセミコロンの後から始まり, that に導かれる副文を目的節に取っている。他方、与格再帰代名詞を伴うのは、命令文 (1903, 1907), that で始まる副文中 (116, 396, 2252, 3157, 3942, 5818), そして biginnan の不定詞 (2943, 3495) の場合であり、残りの 4882 は主文だが目的語に名詞句を取っている。同じ「恐れる」の意味で forhtian, forhton も使われているが、与格の再帰代名詞と共に用いられない。しかし、古高ドイツ語 furhten は自動詞として使われる場合、与格の再帰代名詞が添えられる時がある hartho forahrt er *mo* thoh (しかし彼<=ザカリア>は、とても怖がった、『オトフリート』1-4-47)<sup>18</sup>。ゴート語では, faurhtjan と ôgan (sich fürchten) は、それぞれ、ギリシア語中動相 ἐκθαμβείαθε 及び φοβέομαι を翻訳しているが、両者とも与格の再帰代名詞が添えられるかどうかは一定していない。(前者の例は, ni faurhteip *izwis* <墓のそばにいる白く長い衣服を着た若い男が、マリア達に>恐れるな, <*izwis* は jus [ihr] の与格再帰代名詞である> Markus 16-6. 後者の例は ni ogs *þus* <天使がザカリアに>恐れるな <*þus*> は þu (du) の与格再帰代名詞である Lukas 1-13)。

その他の与格の再帰代名詞を伴っている、感情的・精神的意味を表す動詞を示すと以下ようになる。

huggian (denken, 1546C, 1550C, 2445, 15{3}), mênian (meinen, gedenken, 3445, 4524, 15{2}), talon (überlegen, 2471, 4492, 2{2}), tuehon (zweifeln, 1374, 4171, 3{2}), tuuiflian (in Zweifel versetzen, 328, 4703, 6{2}), gituuiflian (in Zweifel versetzen, 3501 (M), 4742, 5{2}), uuânian (glauben, vermuten, 1879, 20{1}), uuitan (wissen, 653, 4184, 4558, 102{3}), giuuardon (in Acht nehmen, 300, 1516, 2{2}), aftaruaron (beobachten, 3760, 2{1})  
(左から古ザクセン語・意味・再帰形の行数・使用回数・再帰代名詞を伴っている回数を表す。以後同様である)

しかし、これらと同じ感情的・精神的活動を表す動詞でも、与格の再帰代名詞を添えられずに使われているものもある。例えば、faganon (sich freuen), mendian (sich freuen), uundron (sich verwundern) などである。この中で uundron だが、新訳聖書ルカ 2 章47節のギリシア語中動相・未完了・3人称・複数 ἐξίστασθαι (sich entsetzen) を『ゴート語聖書』は、再帰代名詞を添えない usgeisnodedun<sup>19</sup> で訳し、『オトフリート』は、名詞 wuntar と wesan (sein) の過去時称で表し (1-22-37), 『ヘーリアント』では uundron の過去時称で表現している (816)。

#### (e) 再帰的動作

ここでは、ある動詞の表す動作が再びその主語へと戻ってくる動作を再帰的動作ということにする。この動作を表す動詞は、対格・属格の再帰代名詞を目的語にする。他動詞はほとんどすべてが、再帰代名詞と共に使われることができるが、なかには再帰代名詞と一緒に、熟語的に自動詞の意味を持つものもある。

まず、対格の再帰代名詞を目的語にしている他動詞は、21例あった。次に述べるのがそれである。

atômian (befreien, 1717, 5569, 6{2}), ahebbian (erheben, 5362, 5{1}), anthebbian (aufrecht erhalten, 2823, 5{1}), beghan (sich vermessen, 5192, 1{1}), belgan (zürnen, 723, 1439, 4895, 5098,

5120, 10{5}), farsuerian (falsch schwören, 1505, 1{1}), garuuuian (bereit machen, 595, 776, 3450, 4248M, 5{4}), giniudon (sich erfreuen, 1350, 3275, 2{2}), gihaldan (halten, 2645, 9{1}), cûđian (bekannt machen, 5920, 5963, 25{2}), lêdian (leiten, 4074, 31{1}), mârian (verkünden, 853, 3951, 5588, 23{3}), minnon (lieben, 4654, 8{1}), nerian (retten, 5569, 6{1}), tellian (halten, ansehen, 5103, 16{1}), seggian (sich verkündigen, 858, 160{1}), thuahan (waschen, 5475, 4{1}), uuarmian (wärmen, 4945, 4967, 2{2}), uuitan (wissen, 1719, 102{1}), uuendian (sich wenden, 4417, 4491, 5201, 5918, 6{4}), biuuânian (sich zutrauen, sich vermessen, 4689, 1{1})

以上、21例である。この中で *belgan* は、5度再帰形で使われ（4度が直説法過去、残りが不定詞）、残り5度は過去分詞で使用されている（*uuerđan* と1度、残り4度は形容詞的に用いている）。*garuuuian* は、4度再帰形で、残る一つは事物を対格目的語にしている。*giniudon* は、2度とも再帰形だが、同語源の古高ドイツ語 *niotôn* (*genießen*) は『オトフリート』では、対格目的語に再帰代名詞を取らない場合もある<sup>20</sup>。*uuendian* は6度のうち4度対格再帰代名詞と用いられ、残りは与格の再帰代名詞を添え使用されている。ゴート語 *gawandjan* (*sich wenden*) は *σρέπω* の受動・アオリスト過去分詞・男・単・主格 (Lukas 7-9, 44) を訳し、現在分詞に対格再帰代名詞を添えている：*gawandjandans sik*<sup>21</sup>。また、古ザクセン語では *selbo* (*selbst*) を再帰代名詞の後ろに置くこともある、*than scal hi ina selbon êr sundeono atômean* (その時、彼は自分自身を罪から解放することになる 1717, *ina selbon* 1505)。

次に、属格の再帰代名詞を目的語にしている動詞は2例のみであった：*uuelda is thar lâtan coston craftiga uuihti* (<キリストは>悪霊たちに自分を誘惑させようとした 1030), *ef he is ni gomid uuel* (もし彼が、自分自身に十分用心しなければ 2509)。

(f) 相互的動作

ここには前置詞 *undar* に与格の再帰代名詞を置いた表現が含まれる。例えば *thô bigan that folc undar im/ uuerod uundraian*, (その時群衆<=船の乗組員達>は互いに/人々は驚き始めた 2260-1)。同様な表現は 2667, 2673, 5172 である)。ゴート語では副詞 *misso* と再帰代名詞で相互性を表す。例えば, *jah þai mans þai hairdjos qepun du sis misso* (その男達羊飼いはお互いに言った Lukas 2-15) であり, またギリシア語は前置詞 *προς* に相互代名詞 *ἀλλήλων* を添えて表すことがある。

(g) 命令文

命令文にも与格の再帰代名詞がかなり使われる。例えば *seh thi, huemu ik hêr an hand gebe/ mînes môses* (見よ, 私が誰の手に与えるのか/私の食べ物を4609-10) があり, 同様な表現は323, 328, 879, 1085, 1786, 3238, 3289, 3893, 3913, 4040, 4654, 3288, 5585 等である。また, ゴート語でも同じ表現がある。例えば *ni ogs þus, Mariam* (恐れるな, マリア Lukas 1-30) がある〔(d)の説明を参照されたい〕。

3

以上が再帰代名詞の具体的な説明である。約 6,000 行の韻文中筆者が数えた限りでは, 396 の再帰代名詞が使われている。次にこれまで論じられてきた再帰形について, a) 語順と b) *giuuîtan* を例にした意味的側面を取り上げたい。

a) 語順について

ゲルマン祖語においては, 定動詞後置が普通の語順であったと想定されている<sup>22</sup>。『ヘーリアント』では現代ドイツ語と同様に, 副文にこの構文が多数現れる。その語順は大きく3つに分類できる。(1) C+S+R+E+(O)+fV, (2) C+R+E+S+(O)+fV, (3) C+R+E+fV+S。C (接続詞), S (主語), R (再帰代名詞), E (補足語), O (目的語), fV (定動詞)。それぞれの例は次のとおりである。(1) *that he iha obar thesan middilgard mârean scolda* (彼<=キリスト>が自らをこの世に

知らせることになるという 853), al sô he *im* selbo gicôs : (彼<=キリスト>自身が選んだように 1029), (2) that *im* thea uuardos uuiht ne antdrêdin/ lêðes von them liohta : (厩番が何物も恐れぬよう/光の苦しみの 396-7, lêðes 以下は uuiht を修飾し, 枠外配置されている.) (3) that *im* fon Galilea giuuêt godes êgan 960. J. ヴァッカーナーゲルによると, 文中の弱い要素 (強勢のない代名詞や不変化詞及び一定の副詞) は, 一般にその文の第 2 位の位置に置かれる. この位置を J. レーネルトはヴァッカーナーゲルの位置と呼び, 文頭の補文標識 (COMP) と INFL (inflection) の位置 (CONFL)<sup>23</sup> から区別している. 今挙げた例文では, that, al so が COMFL で再帰代名詞や人称代名詞がヴァッカーナーゲルの位置<sup>24</sup>である. 次は主文であるが, 3つに分類でるだろう. (1) fV+R+(E)+S+(E), (2) E+fV+R+(E)+S+(E), (3) S+fV+R+E, 以下が例である. (1) Stôd *imu* thô fora themu uuihe uualdandeo Crist (その時支配者キリストは神殿の前に立った 3758), (2) Than fuorun *im* ôk fan Hierusalem thero iungrono tuêna (それからエルサレムから弟子達の 2 人もやって来た 5956), (3) Managoro drohtin/ geng *imu* thô mid is iungoron, (人々の主は/それから弟子達と来た 1999-2000). レーネルトは CONFL の位置に定動詞が移動し, さらに文体的な規則が文法化されることによって定動詞第 2 位の構文が出来上がったとしている<sup>25</sup>. また, 副文より歴史的に先立つ COMP の無い文がある. 例えば Krist *im* forð giuuêt (キリストは先へ赴いた 1134), He *im* thô bêðiu befal (彼は その時彼ら 2 人に命じた 1837). これらの文が受ける語として指示詞や副詞が生じ, それらからさらに接続詞が発生したとされている. つまり, レーネルトも説明しているように<sup>26</sup>, ゲルマン語の初期には副文はまだ存在しなかった. 『ヘーリアント』では, 例えば thô, thar, than は指示詞的な副詞の他に接続詞の用法がある. (1) thô giuuêt *imu* the godes sunu (そこで神の子は赴いた 3906), (2) Thô he *imu* mid them liudium samad/ frôlîco fôr : (それから彼<=キリスト>は人々と共に/喜んで行った 2676-7), (3) thô he fon theru burgi fôr, (彼<=キリスト>がその町から来た時 3634), (1) (2) は副詞, (3) は接続詞として使われている. また endi (und) は現在は並列接続詞であるが, 次

のように定動詞後置の文もある *endi im selbo gecôs* (そして<キリスト>は自分自身で選んだ 1250), 同様な構文は 2282, 3110, 3729-32, 3760-1, 4185, 5980-3 等である.

b) *giuuîtan* について

以下では, 再帰代名詞と動詞の構文の意味的な側面について, 例として *giuuîtan* の使われ方を 8 項目に分けて考察してみたい.

(1) *giuuîtan* が類似した意味の定動詞に先行している場合

*cuman*(kommen) は246度使われ, 再帰代名詞を添えられているのは 4 度, その内の 1 度が先行されている. *Thô giuuêt imu uualdand Crist,/ gumo fan Galilea, sôhte imu Iudeono burg,/ quâmun im te Cafarnaum* (それから支配者キリストは赴いた/その人は, ガリラヤから探しに, ユダヤ人達の町を/ <キリストと使徒達は> カファナオムに行った 3182-4). *faran* は 94 度使われ, 内 16 度再帰代名詞を伴い, その内の 3 度先行されている. *Krist im forð giuuêt/ an Galileo land, godes êgan barn,/ fôr im te them friundun* (キリストは先へ赴いた/ガリラヤの国へ, 神自身の子は/親戚達のもとへと進んだ 1134-6), *Thô he im mid is gesiðon giuuêt/ eft an Galilœo land, godes êgan barn,/ fôr im te them friundun* (それから彼は使徒達と赴いた/再びガリラヤの国へ, 神自身の子は/親戚達のもとへと進んだ 2290-2), *giuuêt im thurh middi thanan/ thes fiundo folkes, fôr im thô* (<キリストは>赴いた, そこから中央を通して/敵の民の, そこへ<荒野>進んだ 2693-4).

まとめると, *giuuîtan* が類似する意味の定動詞に先行するのは 4 度であり, 後続文はすべて再帰形で, 主語はすべてキリストである. *giuuîtan* は, 後続する文と共にキリストの行動を強調している.

(2) *giuuîtan* が類似した意味の不定詞を取っている場合

*giuuêt im thô gangan* (<ヨハネは> それから赴いた 873, その他 4628-9, 4769, 4786-7, 5160, 5312, 5730, 5743, 5763, 5870-1, 5900 がある). これ以外に不定詞になっているのは *faran* (2168), *siðon* (gehen) (2974) である.

この場合は13度であり, 不定詞は再帰代名詞を伴わない. ここでも, 不

定詞は *giuuítan* の意味を強めている。キリストが主語であるのは 4769, 4786, 2168, 2974 である。 *gangan* との不定詞は一定の決まった言い方であると思われる。

(3) *giuuítan* に *sôkian* (suchen) が定動詞として後続する場合

*Thô giuuêt im oc mid is híuuisca/ Ioseph the gôdo, sô it god mahtig,/ uualdand uuelda: sôhta im thi uuanamon hêm,* (ここでまた、自分の家族と共に赴いた／良きヨゼフは、それを権力者、神が／望んだように、美しい故郷を探しに 356-8), *Giuuitun im thô thi u gôdun tuuê, Ioseph endi Maria/ bêđiu von Bethleem: habdun that barn godes mid im,/ hêlagna Krist, sôhtun im hûs godes/ an Hierusalem* (赴いた、そこで良き 2 人、ヨゼフとマリアは／ベツレヘムから 2 人は：連れていた神の子を／聖なるキリストを、探した 神の家を／エルサレムで 458-61)。これらと同様な表現は 650-2, 712-4, 2982-4, 3033-4, 3170-1, 3182-3, 5974-5 である)。

この表現は 9 例あり、650-2 (*uuillian* [wollen] の不定詞になっている) と 3170-1 を除いて *sôkian* には与格の再帰代名詞が添えられている。また、*sôkian* は 55 度使用され、11 度再帰代名詞を伴い、その内の 8 度がここで使われている。つまり、この表現は一定の言い回しとして用いられていると考えられる。

(4) *giuuítan* が意味の異なる不定詞を取っている場合

*Giuuitun im thô eft te Hierusalem/ iro sunu sôkean,* (<ヨゼフとマリアは>そこで再び、エルサレムへ赴いた／彼らの子を探しに 806, 同様な表現は 960-1, 2802-4, 4796-7 である)。 *Giuuêt imu thô an themu âbande alouualdand Krist/ an thene seli sittien;* (それから、その晩赴いた、全能者キリストは／客間にすわりに 4554-5)。その他の不定詞は *gisittian* (1250), *slâpan* (2238), *uuarman* (4967) である。

ここでは 8 度である。

(5) *giuuítan* が対格を支配している場合

*giuuítit im than uppuuegos:* (<良き行いをしてきたその人は>それから上へ至る道を進んで行く 3458)。

(6) *giuuítan* の前後 3 行以内に再帰形がある場合

uuisse *imu* selbo that dagthingi garo./ Thô giuuêt *imu* ûse drohtin forð/ endi *imu* thô an Effrem alouualdo Krist/ an theru hôhon burg hêlag drohtin/ uunode mid is uuerodu, (知っていたキリスト自身, 決められた日を, 十分に. /そこで我々の主は先へ赴いた/そしてそれから, 全能者キリストはエーフライムに/高い所にある町に, 聖なる主は/人々と共にずっと住まわれた 4184-8). これと同様な表現には 531-3, 780-2, 832-4, 1024-7, 1189-90, 2799-2802, 4714-18 がある. つまり(1)・(3)同様, 様々な再帰形が, giuuûtan を中心とする文脈で繰り返し使われることが分かる.

(7) giuuûtan が再帰代名詞を添えられ単独で現れている場合

これには, 424, 677, 1994, 2088, 2158, 2282, 2305, 3100, 3163, 3170, 3585, 3663, 3706, 3906, 4010, 4198, 4212, 4237, 4928, 5440 がある.

(8) giuuûtan が再帰代名詞を添えられず, かつ補足的な語句や文を伴わない場合

これには, 982, 2900, 4232, 4622, 4928 がある.

さて, 以上をまとめると次のようになる. ア) giuuûtan を含む表現は様々な条件で使われているが, (1)―(4), (6)から分かるようにそれらには文章上の一定のスタイルのようなものがある. また, この点は先に述べた 2章(d)の antdrâdan にも当てはまる.

イ) giuuûtan は 67 度使用され, 再帰代名詞と共に用いられていないのは 6 度で, (8)から明らかのように, その内の 5 度が単独で, 客観的とも言える文脈で使われている. この点は他の幾つかの動詞にも言える. 例えば, 'ni bium ic, quað he, 'that barn godes' (「私<=ヨハネ>は神の子ではない, と彼は言った」915) は客観的な事態を述べ, ic bium *mi* ambahtman, (私は召し使いとして働いている 2112) は主観的な事態を述べていると思われる<sup>27</sup>. このような用法は, ホルトハウゼンの言うように, 先に挙げたギリシア語中動相の「動的中動相」に相当すると考えられる.

ウ) さらに 2章c) を見ると分かるように giuuûtan はその主語の半数が, 中心人物キリストであることから, 与格の再帰代名詞との再帰形は比

較的重要な場面で多く使われていると推定できる。その他の動詞も一般的に、再帰形の場合キリストを主語にすることが多い。

エ) 以上から *giuuítan* を含め、他の再帰代名詞を添えた構文は、文体論的理由で使用されていると推測することができる。また、精神・身体面での動的活動を表す点では、今まで検討して来た再帰形は、*giuuítan* からも窺えるように、ギリシア語中動相に似ている。

最後に『ヘーリアント』での再帰形の特徴が、良く現れていると思われる部分を引用して結びとしたい。

次は、キリストが囚われの身になる直前の場面である。

*Giuuêt imu thô eft thanen/ sôkean is gesiðos* : 途中略 / ... *Geng imu eft thanen/ thriddeon siðu te bedu* 途中略 / *geng imu thô eft te them is iungarun*, (<キリストは>それから再び向かった / 弟子達を探しに (略) / 再びそこから向かった / 3度目のお祈りのために (略) / それから再び、彼の弟子達の方へ向かった 4796-4804)。

そしてキリストの十字架での処刑、復活、昇天へと続く

*Giuuêt imo up thanan,/ sôhte imo that hoha himilo ríki endi thena is hêlagon stól:/ sitit imo thar an thea súídrón half godes,/ alomahtiges fader* (<キリストは> そこから上の方へ、去って行った / 高い天の国と彼の神聖な座席を探しに / そこで、ずっと座っている、神の右側に / 全能なる父の 5974-6)。

*giuuítan* から始まるこれらの文は、頭韻に加え、与格再帰代名詞による再帰形の反復によって、この叙事詩に一層の効果をあたえている。そしてこの辺に、『ヘーリアント』における再帰代名詞の用いられ方の本質を見ることができるのではないだろうか。

## 注

- 1 『ヘーリアント』と言う題名は、その発見者で最初の編者である、J. A. シュメラー (Johann Andreas Schmeller) による。原作は残っていないが、2つの写本(M, C)と3つの断片(P, V, S)がある。不明な点も多いが、この中で最古のものはM写本で、850年頃ニーダーザクセンのコルヴェイ (Corvey) 修道院で筆写され、74ページ半ある。現在ミュンヒェンで保存されている。同じ頃の写本として、東ベルリンのドイツ歴史博物館に所蔵されている断片 P (das Prager Fragment) と、1977年に発見され現在ミュンヒェンのバイエルン国立図書館に収められている断片 S (Straubinger Fragment) がある。少し遅れ860年頃の作として断片Vがあり、マインツにある。最も完全に近いとされるのは、C写本であり、1—5968行までの詩行を含んでいる。この写本には、朗読のための段落(5部72節)が原作者自身によって、ローマ数字で入れられている。

本稿で使用したのは第6版、Heliand und Genesis, hrsg. von Otto Behaghel, Halle 1948 である。

- 2 Behaghel (1948) V. 4020 など。
- 3 Ibid., V. 4380 など。
- 4 Felix Genzmer: Heliand und die Bruchstücke der Genesis, Anmerkungen und Nachwort von Bernhard Sowinski, Stuttgart 1989. S. 243.
- 5 Ferdinand Holthausen: Altsächsisches Elementarbuch, Heidelberg 1921. S. 113 ff.
- 6 関心の与格 (Dativus ethicus) について、例えば G. カーム (George O. Curme: A Grammar of the German Language, New York 1922. S. 501-503) は次のように述べている。1) ある陳述で感情的 (emotional) な関心を持つか持つと期待されている人を示すために使われる、2) 1・2人称に使われ、3) 会話中で話者が重要と思う場合や聞き手にそう気付かせたい場合に用いられる、4) 利害の与格 (Dativus commodi oder incommodi) と同じ使われ方もある。つまり、行為での実質的 (material) な利益・損害を受ける人に用いられる。O. ベハーゲル (Otto Behaghel: Deutsche Syntax, Heidelberg 1923. S. 627-633) と W. ヴィルマンズ (W. Wilmanns: Deutsche Grammatik, Straßburg 1909. S. 616-621) にもこれらの与格の説明があり、それに続いて『ヘーリアント』の与格の再帰代名詞に関して解説している。なお、ゼールト (注8参照) は関心の与格の例として *uuisse imu selbo iro hugiskefti* (キリスト自身、彼ら<筆注者: 弟子達>が心で考えていることを

知っていた 4558-9) 及び 653, 4184 を挙げ、利害の与格の例として *that sie im thar at them menigi mates endi drankes,/ thigidin at theru thiodu* ; (彼らがそこでその群れから食べ物と飲み物をもらおうようお願いするために 1224-5) を挙げている。

- 7 Holthausen. S. 176.
- 8 Edward H. Sehr: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis, Göttingen 1966. S. 233.
- 9 Holthausen S. 176.
- 10 Friedrich Slotty: Einführung ins Griechische, Berlin 1964. S.22.
- 11 Holthausen. S. 176. この分類はベハーゲル (1923. S. 631f.) にもある。
- 12 Die Gotische Bibel, hrsg. von Wilhelm Streitberg Heidelberg 1971.
- 13 Duden Band 4, Die Grammatik, 1984. S. 109. それによると、純粹な再帰動詞(Echte reflexive Verben) は次の6項目で示すことができる。再帰代名詞は、(1)取り去ることができない、(2)他の代名詞或は名詞で置き換えられない、(3)他の名詞等と並列させることはできない、(4)尋ねることはできない、(5)否定できない、(6)一定の位置に置かなければならない。例えば、文頭の位置を占めることはできない。
- 14 非常に似ている文でも、再帰代名詞のある場合とそうでない場合がある。例えば、*Thar imu up giuuêt/neriandeo* Krist 4237-8, に対して *Krist up giuuêt/fagar fon them flôde, friðubarn godes*, 982-3, また、*Krist im forð giuuêt* 1134, がある。統語的(3章aで論じた)或は音韻的理由から、再帰代名詞は省略されたのかもしれない。また、再帰代名詞か人称代名詞かはっきりしない表現がある例えば、*that sie im tô selbun,/ te them godes barne gangan mahtun*, (彼ら<筆者注: 厩番達>は、自身のもとへ/神の子のもとへ行けるように 428-9) の例で、ゼールトは *im* を再帰代名詞と見なすが (*tô* は *te* と共に使われる前置詞で、*selbun* は *the godes barne* を受ける), ベハーゲル (Otto Behaghel: *Syntax des Heliand*, Wien u. Leipzig 1897. S. 211) とゲンツマー (S. 16) は、人称代名詞と見なし *im* は *tô* の与格で *them godes barne* を受け、*selbun* は弱変化複数主格で *sie* を受けるとしている。
- 15 Beowulf Cambridge, 1968. 『ベオウルフ』3128行の韻文中に、*gewitan* は29度使われ、10度が与格の再帰代名詞を添えられている。『ヘーリアント』との共通点は、1) 章や節の書き出しでしばしば用いられる、2) 不定詞を伴う、3) 再帰代名詞は主語より前にあることが多い、4) 主語のない場合があ

- る, の4点である.
- 16 千種真一: ゴート語の聖書, 東京, 1989. 72-3, 90-1, 122-3 ページ.
  - 17 前島儀一郎: Old Norse Reflexive Verbs, 名古屋大学文学部十周年記念論集, 名古屋, 1959. 13ページ.
  - 18 Otrfrids Evangelienbuch Tübingen, hrsg. von Oskar Erdmann 1965.
  - 19 千種真一, 118-9 ページ.
  - 20 例えば 1-28-15.
  - 21 千種真一, 124-5, 134-5 ページ.
  - 22 Jürgen Lerner: Diachronic Syntax: Verb Position and COMP in German; In: Studies in German Grammar Holland, 1985. S. 106.
  - 23 Ibid., S. 117ff. を参照されたい.
  - 24 Ibid., S. 120-3
  - 25 Ibid., S. 127.
  - 26 Ibid., S. 124 ff.
  - 27 Behaghel (1923, S. 616f.) は uuesan (sein)+Dativ の構文は, ラテン語からの影響であると指摘している.

## Der Gebrauch des altsächsischen Reflexivpronomens im „Heliand“

— mit Hinsicht auf das Medium —

Akira SHIDA

„Heliand“ wurde in altsächsischen Stabreimversen um 830 geschrieben. Es ist ungeklärt, wer diese Epik verfaßte.

Darin findet sich eine große Menge von Reflexivpronomina, womit viele Verben Reflexivkonstruktionen bilden. Diese Reflexivkonstruktionen klassifiziere ich in sieben Typen, wobei ich die Ansichten von F. Holthausen und F. Slotty mit in Betracht ziehe.

Diese sieben Typen sind folgende : (a) die Ruhe, (b) die Bewegung des Interesses, (c) die Tätigkeit einer körperlichen Äußerung, (d) die Tätigkeit einer geistigen Äußerung, (e) die reflexive Bewegung, (f) die reziproke Tätigkeit, (g) der Imperativ.

Ich erkläre diese Typisierung näher wie folgt : (a) bedeutet eine dauerhafte Situation. Dazu gehören 12 Verben, worunter sich „hebbian“ (haben) in fünf, „uuesan“ (sein) in sechs Gruppen einteilen läßt. (b) bedeutet eine vorübergehende körperliche Bewegung, die einer Person Nutzen oder Schaden bringt. Dazu gehören 37 Verben. (c) bedeutet eine körperliche Bewegung, die die körperliche Äußerung einer Person darstellt. Dazu gehören 15 Verben. (d) bedeutet eine geistige Bewegung, die die geistige Äußerung darstellt. Dazu gehören 11 Verben. (e) bedeutet eine geistige oder körperliche Tätigkeit, die von einer Person ausgeführt wird und wieder zu ihr zurückkehrt. Dazu gehören 23 Verben. (f) bedeutet eine gegenseitige Handlung. Dazu gehören 4 Verben.

In (g) wird oft der reflexive Dativ gebraucht. Dazu gehören 10 Verben.

Wir können daher sagen: In (a), (b), (c) und (d) gebraucht man oft das Reflexivpronomen im Dativ. Nach Holthausen entsprechen diese vier Typen dem griechischen Medium. In (e) ist auch oft das Reflexivpronomen im Akkusativ oder Genitiv zu benutzen. Damit funktionieren einige Verben als Intransitive.

Nach den bisherigen Ausführungen können wir zweierlei Aussagen machen, über die Wortstellung der Reflexivkonstruktion und über das Verb „giuuûtan“, das fast immer den reflexiven Dativ mit sich trägt.

Die Wortstellung teile ich in sechs Klassen ein, weil sie trotz der oberflächlichen Unregelmäßigkeit eine Ordnung hat.

Über das Verb „giuuûtan“ läßt sich herausfinden: die Konstruktion „giuuûtan“ + der reflexive Dativ verbindet sich meist in den wichtigen Szenen mit bestimmten Ergänzungen oder einigen festen Sätzen. Diese Kombinationen wiederholen sich und geben der Epik starke Bedeutungsnuancen. Die Reflexivkonstruktion, die sich mit „giuuûtan“ bilden läßt, zeigt uns die klarste Prägung, die sich in den oben beschriebenen Reflexivkonstruktionen finden läßt. Vielleicht bleibt in all diesen Reflexivkonstruktionen die Spur des griechischen Mediums.

Zum Schluß gehe ich auf einen Passus ein, der wohl das Wesen der Reflexivkonstruktion im „Heliand“ am besten verdeutlicht.